

器楽合奏・発表まで—グループ活動を通して—

○安藤昌子 飯田和也 (名古屋柳城短期大学)

1. 目的 (はじめに)

器楽合奏は、表現発表会や各種行事の中で多くの機会に取り入れられている。子ども達が合奏をする時、選曲や編曲 (音作り) の方法、楽器の扱い方、発表のとき舞台での配置をどうするかなど、保育者として捉えておきたいことがらは少なくない。

保育科2年生では器楽合奏を発表することを想定して、グループで選曲から音作り、発表へとつなぐ活動を行った。この授業の目的は、子ども達が発表会で合奏をする時に保育者として捉えておきたいことは何かを理解することである。計4回の授業と各グループの発表状況、また、配布用紙の記述から学生が理解したものを読み取ることで、器楽合奏とグループ活動の意味について考察する。

2. 方法

対象：保育科2年生

期間：2003年6～7月、計4回の授業

第1回 授業は、この活動について以下の説明を行なった。

○1クラス約50名を3グループに分割、リーダーを各3名選出する。(欠席時の対応など3名が適当と判断した) 活動の進行状況やまとめのための用紙を終了5分前に各自に配布する。(毎回、記入後に回収)

○使用楽器について⇒使用楽器は、鍵盤ハモニカ・アコーディオン・木琴・鉄琴・タン布林・鈴・カスタネット・トライアングル・ウッドブロック・小太鼓・大太鼓・シンバルで、他の楽器の使用は、自由である。

○楽曲の選択と演奏について ⇒2曲 (課題曲「手をたたきましょう」と自由曲) で、双方、必ず前奏を付ける・2番まで演奏する・演奏のみ (歌唱なし)・指揮者を配置する

○発表について ⇒教壇の段差を利用すること・観客が存在することを想定して発表すること・ビデオ撮影をする・グループで工夫したことを合奏の前に指揮者が発表する。

○活動の流れ ⇒第2回、第3回⇒自由曲の選択、音作りの段取りと明確な役割分担。第4回⇒発表

○編曲作業について⇒発表した2曲のうち1曲を各自選択、編曲して、期日までに提出する。

3. 結果および考察

学生は、楽器法や楽曲分析と合奏までの音やリズム作りの習得と編曲作業の経験があり、一通りの知識を備えていることをこの活動の前提とすることを付け加えておく。

活動を進めるに当たって、3人のリーダーが中心となり、一人一人の意見を纏める方法と役割分担を明確にする指導をした。

グループ活動の授業は、他者理解・集団としてのまとまりを促進するなどの利点があり、意見を出し合うことで「お互いの考えを肯定しあうようなかわり合いの機会を持ったりすることにより、好ましい人間関係」を作り出し、クラスのまとまりや自己形成を図るものである。

(注1)

○演奏について

自由曲の選曲は、各グループで以下のように決定した。

クラス	グループA	グループB	グループC
A	小さな世界	すいかの名産地	世界中の子ども達が
B	アンパンマンマーチ	ハイホー	となりのトトロ
C	さんぽ・トトロ	アンパンマンマーチ	星に願いを
D	アブラハムの子	世界中の子ども達が	とんでったバナナ

学生が興味を持ち、なお且つ楽しく演奏できる選曲であった。Aクラス・グループCでは、2曲をつなぐ工夫がみられた。また、選曲変更などの試行錯誤のグループもみられた。編曲 (合奏の音作り) は、基本的に自由である。使用楽器についてピアノの使用可能か、指示された楽器の使用や持ち込み楽器はいいか、前奏をつけるのか、指揮者は必ず必要かの質問も、あらかじめ提示してあったがみられた。

○発表について

各クラスはじめのグループAの発表後には、主に2点の指導をした。

第1には、指揮者と演奏者が一体となっているか？ 指揮者を捉えた演奏は、指揮者の速さに演奏者が合わせることで音は一致することであり、音のずれはなくなる。

第2には、観客を意識した配置になっているか？ 捉えておきたいことは、楽器の配置である。すなわち

舞台（教室正面）での子ども達の位置（学生の配置）をどうするかである。

この2点は、表現発表会を行なうときに捉えておきたい環境として重要である。想定した観客は、子ども達の家族や友達（実際は学生であるが）である。出演者である子ども達の写真を撮ったり、ビデオ撮影したりする家族が、子ども達を観ることができる配置をしているか、を先ず心がけたい。この活動のはじめに発表時に“教壇の段差を利用”することを説明したが、この段差を利用して演奏者一人一人を観客席から観ることができる配置を捉えてほしいという意図があった。

はじめのグループAの発表後に以上の説明を行なうと、グループB、Cの発表では配置を捉えた発表が実践されたので、意図していたものは、伝わったと理解した。

また、全発表終了後は、学生の反省や意見を纏める目的で、各グループ・リーダーの意見を募り、学生が配布用紙に記述する材料とした。

○配布用紙の記述から学生の反省・意見を以下にまとめる。

♪：演奏について

- ・指揮よりテンポがはやくなっていた
- ・本番は緊張するので速くなりがち→指揮者が上手くひっぱる
- ・指揮者を見て音を合わせたほうが見た感じもいい
- ・指揮者がいなかったのとまもらなかった（指揮者なしのDクラス・グループC）
- ・鈴の使い方・両手に持って交差して使う工夫
- ・木琴、鉄琴でグリッサンドが効果的、ステキ
- ・鉄琴のジャラーンがよかった
- ・堂々と大きく打楽器をたたいていたのでまとまった感じ

・強弱をつける

- ・「あっはっはっ」を強調するとよい
- ・シンバルが欠席なので音が少し寂しかった
- ・1曲目と2曲目の楽器を変えていた
- ・2台のアコーディオンがハモっていた
- ・小太鼓の音は迫力があつた
- ・すべての音が主役の感じがした

♪：配置について

- ・見えない演奏者がいた
- ・みんなの顔が見えるようにする
- ・立ち位置がよかった
- ・見てもらうことを考えて動きを付けていた
- ・先生のアドバイスで配置がととてもよくなった

♪：その他の意見

- ・楽しくできた
- ・時間がもう少し欲しかった
- ・みんなの顔が真剣で頑張っているなど思った
- ・もっと笑顔でやったほうがいい
- ・オーバーなくらい身振り手振りすればよかった
- ・動きがあつたので参考にしたい
- ・いろんな工夫が見えてきたのでもう一回やりたい
- ・もっと自主的に練習すればよかった
- ・一人一人の気持ちが音になって表れていた

4. おわりに

配布用紙の記述から、保育者として発表会をするときに捉えておきたいことを、一人一人の学生がグループ活動の体験を通して理解したことが見えた。前述、理解と併せて、グループ活動では学生同士のコミュニケーションが活発に行なわれていることも毎回の授業と用紙の記述から確認した。与えられた音で合奏するのではなく、自分たちで工夫して創り出す（能動的な）音作りは、より大きな達成感とともに音楽に対する興味を増すものである。

以下に今回のグループ活動を纏める。

- ・楽器法や器楽合奏の再認識
- ・合奏できた達成感を味わう
- ・発表することで配置・環境を捉える
- ・他の発表を観る→いろいろな音作りを聴く体験
- ・人間関係を深める
- ・自己啓発（自分の意見を言う）
- ・他者理解（人の意見を聴く）
- ・学生同士のコミュニケーション活動
- ・グループのまとまりを促進

活動の回数について、昨年度は実質3回の授業を設定したが、打ち合わせだけで練習時間をとることができないという記述が多数見られたのと、実際に授業回数が活動内容に比べて少なかつたという反省から、今年度は実質4回に変更した。回収用紙に設定時間の不足の記述が少ないことから、グループ活動では、4回が適当であることを理解した。

今回の活動は、一人一人の学生の音楽体験をより豊かにする器楽合奏の授業のあり方の1つの方法として大きな成果が得られた。今後も、本授業を通して、学生の持つ音楽的感性や創造性の育成を図る音楽体験について探っていきたい。

注1 構成的グループエンカウンター・ミニエクササイズ
56選 小学校版 八巻寛治 明治図書 2001年5月
p.8-9